

平成29年度 京都教育大学附属幼稚園 学校評価

自己評価区分	
A	十分達成できた
B	概ね達成できた
C	十分には達成できなかった
D	ほとんど達成できなかった

① 教育活動その他の学校運営に関する事項（学校教育法に基づく評価）

本年度の重点目標	具体的な取組内容	自己点検評価	自己評価区分	学校関係者評価	改善策
(1) 発達の特徴に応じた幼稚園教育の推進	<p>①次期幼稚園教育要領の改訂に合わせて、「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」を意識した保育計画を立てる。</p> <p>②昨年度より取組んでいる、本園の独自研究である「幼児の“探究力”を探る」を継続し、幼児の探究力の発達的な変化をとらえる。</p> <p>③保護者との連携を図り、一人ひとりの園児が個性を発揮できる保育を推進し、保護者との信頼関係をしっかりと構築する。</p>	<p>①「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が新幼稚園教育要領に明記されたことで、保育計画においても10の姿を意識するようになったが、そこに到達させるべく幼児にかかわるのではなく、育てて行く方向を意識しつつ、小学校以降の学びも視野に入れ、長期的に個々の幼児の育ちをとらえていくという意識を持つことの大切さを再認識できた。</p> <p>②今年度は「知りたい、面白い、不思議」など“ひっかかり”を持ったから、主体的に対象へと働きかけている“かかわり”を分析することによって、探究のプロセスや探究を推進する資質・能力があり、それを整理することができた。</p> <p>③一人ひとりの幼児の個性を大事にしていることを保護者に丁寧に伝え、理解を図りながら多くの保護者と連携をとることができた。中には、保育の方針に対する疑問などを投げかける保護者もいたが、時間を置かず懇談などの時間を個別にとり、理解してもらえるように努めた。</p>	A	<p>幼稚園教育要領の改訂はあるものの、保育の根源については変わることなく、幼児を中心に据えた保育実践を大事にしてほしい。</p>	<ul style="list-style-type: none"> ・幼稚園指導要録の形式も併せて改訂された。「幼児期の終わりまでに育って欲しい姿」が明記され、より、保育実践でも意識化が図られるだろう。しかし、個々の子どもをこれらの育って欲しい姿へと到達させなければならぬ、と幼児を追い立てるのではなく、長期的な目で育ちを方向付けて行くことを目指したい。 ・常に家庭と幼稚園が一体となって、個々の幼児を育てていることを意識し、保護者の様子にも目を配り、きめ細かで丁寧な連携を図る。

<p>(2) 幼児に小学校 以降の生活や 学習の基礎と なる能力を育 成</p>	<p>①幼小連携アプローチカリキュラムの策定に向けての、附属桃山小学校との連携を進める。 ②附属桃山小学校・附属桃山中学校と教育理念や教育方法の連携を行い、教員間の情報交換を密に行い、学びの連続性や互惠性に着目した保育を実践する。</p>	<p>桃山地区三校園研究の交流活動とも関連させ、交流の事後には必ず園児・児童の交流の姿について話し合った。それによって1年生の教員との園児・児童の学びについて、ある程度の共有ができた。また、従来より行ってきた行事等への小学校・中学校の教員の参加・出席を呼びかけ、幼稚園教育への関心を喚起する機会となった。しかし、環境を通して行うという幼稚園教育の独自性を理解してもらう取組までには進展させることはできなかった。</p>	<p>C</p>	<p>小学校、中学校との交流の機会が増え、双方の教員の異校種への理解が進むチャンスとなるだろう。これまで以上に、幼稚園で実践していることを広く知らせて行く努力をしていってほしい。</p>	<p>幼稚園の実践を伝え、小学校、中学校との連携の図れる交流を、保育場面だけでなく、教員間の交流も図っていく。また、新幼稚園教育要領には、小学校との接続期を意識した教育課程を考慮すべきという言葉もあるので、「スタートカリキュラム」についての学習なども提案していく。</p>
<p>(3) 大学や地域と の連携の推進</p>	<p>①大学と連携し、「グローバル人材育成プログラム」事業に取組み、小学校以降のグローバル人材育成にかかわる実践等の基礎を育む。 ②大学幼児教育科教員の指導助言を得ながら、幼稚園教育関係者との協働研修会を充実させ、公立幼稚園との協働を図るとともに、本園の教員の資質向上に努める。</p>	<p>①正教諭の数が他校種に比べ、非常に少ないため、「グローバル人材育成プログラム」の三つの島への参加は今年度は見送った。しかし、27年度より行っている、外国語を母語とする教員をゲストティーチャーとして招き、幼児がかかわる機会は継続して実施した。 ②昨年度に続き、幼児教育協働研修に参加した。今年度の第1回目として、本園が保育を公開したのを皮切りに、京都市立こどもみらい館共同研修機構とも連携するなど、協働研修の場が広がりつつある。</p>	<p>B</p>	<p>国立大学附属幼稚園が他にないため、井の中の蛙になりがちだったが、こういった他園の教員に積極的に保育を公開し、率直に意見や感想を交換できる機会を持つことは、教員の資質向上が期待できる貴重な場である。継続して行ってほしい。</p>	<p>「グローバル人材育成プログラム」の島には一つでも参加して、基礎時期としての幼稚園期のカリキュラム開発に取り組んでいく。 引き続き、幼児教育協働研修への積極的な参加を図り、新任教員、中堅教員の研修の一環と考え、資質向上につなげる。</p>
<p>(4) 教育実習の環 境整備と指導 の充実</p>	<p>①昨年度より改訂した教育実習評価表の検証を行う。 ②教員間の情報交換を密にして、全教員が一丸となって教育実習生の指導にあたる。</p>	<p>教育実習に携わる教員全員が、自分の担当実習生だけでなく、実習生全員の保育指導を交代で見るとし、実習評価が担当教員だけのものとならないように改善した。また、他教員からの評価を、振り返りシートを用いた実習生との面談(振り返り)時にも還元して、多面的な指導ができるようにした。</p>	<p>B</p>	<p>学生の指導が年々大変であるとは聞いているが、教育実習指導は附属学校園の使命である。園児にとっては、若い感性の実習生と触れ合うことで、いい刺激ともなると思う。</p>	<p>教育実習評価表については、全学での取組となると考えるので、幼稚園で実習に携わる教員で、評価項目、レベルの共通認識を図り、評価の妥当性を取りつつ、評価を行うようにする。</p>

平成29年度 京都教育大学附属幼稚園 学校評価

自己評価区分	
A	十分達成できた
B	概ね達成できた
C	十分には達成できなかった
D	ほとんど達成できなかった

② 附属学校園の機能向上に関する事項

本年度の重点目標	具体的な取組内容	自己点検評価	自己評価区分	学校関係者評価	改善策
教育実習指導のより一層の充実及び教育実習の改善 (中期計画 35)	大学の实地教育運営委員会と協働し、教育実習指導や実習評価の改善に取り組む。	大学实地教育運営委員会からの「振り返りシート」を活用することで、より効果的な実習を行うことができた。また、实地教育運営委員に幼稚園に来ていただくことで、教育実習の実態や実習生についての情報を共有できた。	B	教育実習期間前の学校評議員会であったこと、また、保護者アンケートにも評価項目がなかったため、評価は特になし。	大学幼児教育科の教員との連携を今まで以上に図り、実習期間中の日常的な実習生の様子について、きめ細かな情報共有と配慮を行う。
大学の方針に基づく教員養成及び実践的教育研究への協力 (中期計画 36)	①大学の「グローバル人材育成プログラム」事業に協力し、附属学校において保育実践を行う。 ②本学教員と協働して幼児教育協働研修に参画し、京都府下幼児教育関係者に保育公開を行う。	①「グローバル人材育成プログラム」のメンバーへの応募を促されたが、他校種よりも正教諭が少ないという事情から、今年度は見送った。しかし、実践だけは蓄積して来年度以降へ活かしたいと考え、外国語を母語とする講師との交流の時間は確保し、継続した。 ②幼児教育協働研修は2年目を継続し、新たに研修に参加した京都市こどもみらい館共同研修機構とも連携して、保育公開を行った。	B	附属幼稚園として1園しかいないため、どうしても他の方からの意見を聞き、学ぶ機会が少ないことが気になっていたが、こういった外からの目や意見がいただける研修の機会は貴重であり、どんどん増やして、教員の資質向上に努めてほしい。	①来年度は「グローバル人材育成プログラム」のカリキュラム作成の一つには参加し、大事な基礎時期である幼稚園期のプログラムの作成に取り組む。 ②来年度は教員集団の半分以上が入れ替わるので、基礎的な保育力を付けられるような研修へと、幼児教育科教員と連携して行う。
地域の教育力向上への貢献及び教育研究活動の成果の公表 (中期計画 37)	①本園の独自研究を公開する、研究発表会を開催する。 ②地域や全国の教育委員会、その他学校関係者の視察、参観、及び学生の卒業論文の実験、観察などを積極的に受け入れる。	①平成30年1月27日に幼児教育を考える協議会を開催し、200名の参加者を迎えた。 ②短期大学教員、学生の参観を受け入れたほか、中国の教育関係者20名の視察も受け入れた。	A	幼児教育のために必要な幼稚園であることをアピールする貴重な機会なので、このような機会をこれからも大事にしてほしい。研究の内容については、広くわかりやすく伝える工夫を、これからもいっそう続けてほしい。	研究発表会は来年度も開催する。参加希望者をできる限り受け入れる工夫をする。また、午後からのみの参加者にも、幼稚園の施設や活動後の様子を自由に見学できるような時間を設け、幼稚園の存在等のアピールを図る。